

おばあちゃん、どこへ行ったの？

速水 茂夫

青山ライフ出版

この本は縦書きでレイアウトされています。

ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあることをご了承ください。
本電子書籍は購入者の閲覧目的のためだけにファイルの閲覧が許諾されています。
目的を超えた転載、配信、送信などの行為は著作権法上、禁じられています。

桜の花びらが宙に舞っていた。

「今年の桜もそろそろ終わりだな」

牧原忠がうつろな目で呟いた。人影もまばらな公園で一人淋しく酒をのんでいる。彼は印刷屋を経営していたが一ヶ月程前に倒産してしまったのである。

「やあ、お久しぶり！」

声に振り向くとゴマ塩頭に毛むくじやらかな顔がそこにあった。

「なあんだ、易者さんかい」

「なあんだはないでしょ。なあんだは」

望月胡堂の顔が少し歪んだ。望月は桜木町の裏通りで通行人を相手に主として手をみている。牧原も何回か彼に手相を見てもらった事があった。望月は牧原の横に腰をおろしてワンカップを勧めた。

「おばあちゃんはお元気？」

「ああ元気だ」牧原の返事はそっけなかった。

おばあちゃんというのは牧原の妻、ちずるの母親、小池さよのこと。さよは七十五才。さよには三年前に他界した夫からかなりの財産がころがり込んでいた。そして関内に在る三棟のマンションも彼女名義である。

舞い散る桜の花びらが夕陽を浴びて真っ赤に染まった。牧原は何故かその真っ赤な花びらから血の色を連想した。そして血の色がさよの姿にだぶって写った。その時彼は脳裏に強烈に弾けるものを感じた。

* * *

そのビルは元町商店街から少しはずれた所に在った。四階建の雑居ビルである。その三階の角室に『春日井探偵事務所』と小さな看板が掲げてあった。所長の春日井明彦は三年前に警視庁を退職して探偵事務所を設立した。春日井の他には彼の若い助手と事務員の女性が居るだけである。

事務所のドアのブザーが鳴って望月胡堂がやって来た。

「所長、お久しぶりです」

「よお。モツちゃんかい」

学生時代のサークルの後輩であった望月を春日井はモツちゃんと呼んでいる。

ク、クシユンとくしゃみをして春日井はチンと音を立てて鼻をかんだ。

「いやあ花粉症でたまらんよ」そう言って彼は又、クシユン、クシユンとたて続けにくしゃみをした。

「大分つらそうですね」

「毎年この時期はつらいな」

「あれ、彼女もそうですか？」

望月は春日井の横でマスクをかけてワープロとにらめっこしている女性にチラッと目を向けた。

「ええ、わたしも花粉症なんですの」

女性事務員はワイプロを打つ手を休めて目薬をさした。

「彼女は俺よりも重症みたいだな」

二人は応接セットに腰をおろした。客は他にはいなかった。マスクの女性がコーヒーを運んで来た。望月は事務所に入った時から異臭を感じていたがその異臭がコーヒーの甘い香りとまじり合った。

「牧原さんちのおばあちゃんが行方不明になったみたいですよ」

望月はそう言って春日井の細い目をじっと見据えた。

春日井の顔が少し歪んだ。

「行方不明？」

望月は遠方をまさぐるように見ながら、

「ちようど一週間前の金曜日から行方不明になったみたいですね」

「金曜日ってずいぶんはつきり分かるんだね」

「だって前日の木曜日には家に居ましたから」

「家に居た？」

望月は首をゆっくりと縦に振った

「もう少し詳しく話してくれないかい？」

春日井はテーブルに置いてある来客用のシガレットケースの蓋を開けて望月に煙草を勧めた。